

駒場友の会

会報第20号

ホームカミングデイと

ギター演奏会

今年で第十一回となった東京大学ホームカミングデイが十月二〇日(土)に開催されました。駒場キャンパスでの行事として、駒場友の会では、卒業生による音楽演奏会を開催しました。

演奏者は谷辺昌央さん(文学部西洋史学科九八年卒業)。在学中に、東京国際ギターコンクールで首席入賞するなど国際的なクラシックギター奏者として目覚ましい活躍をされています。

駒場コミュニケーションンプラザ北館での演奏は、アヤラからユバンキまで多岐にわたり、ラテン・フォークローレの世界に聴衆一同引き込まれ、その奥行きに深さに圧倒されました。卒業生によるホームカミングデイ行事に相応しい演奏会となりました。



また、昨年からの時計台公開をあわせて実施したところ、多くの会員会友の参加をいただきました。春のキャンパスツアーに参加できなかったのが今回来られたという学生ご父母の方々、久しぶりにキャンパスを訪ねられた卒業生などが時計台の上まで上がって歴史と眺望を楽しめました。今年の十月にも開催を予定していますので、楽しみにお待ちください。

味覚のアトリエ@駒場

二〇年以上にわたって、フランスで毎年十月に実施されている味覚教育イベント「味覚の一週間」が昨年に引き続き日本各地の会場で開催されました。

これにちなんで、駒場友の会では、「味覚のアトリエ@駒場」味覚と食に関するワークショップを十月二三日(火)に開催しました。会場は、駒場ファカルティハウスセミナー室。



今年の味覚のアトリエに参加した学生達とお二人のシェフ(中央)。この会の最後には、「枯葉」や「ボラーレ」の歌唱があり、会場が盛り上がりました。

講師は、「ル・シズイエム・サンス・ドゥ・オエノン」(銀座六丁目)オーナーシェフのドミニク・コルビさんと、駒場キャンパスの「ルヴェ・ソング・ヴェール」のオーナーシェフ伊藤文彰さん。定員は六〇名でしたが、学生と友の会会員会友の申し込みですぐに満席になりました。

今年のテーマは、香辛料(エビス)。コルビシェフの四〇分の講義では、日本酒や豆乳など日本の食材とエビスの組み合わせによる新しい味の発見について解説とデモがありました。



コルビさんが試食用に用意された、豆乳のスープと、香料豊かな魚料理、さらに日本酒と塩麹を使ったデザート。



伊藤シェフは、ご自身が旅をされた中近東のエビス事情も紹介しながら、子羊のソテー、タジン風のコンディマン、カッテージチーズ入りハーブサラダを披露(写真上)。

これに、ガトーエビス(香辛料入りの焼き菓子)を添えました。

ピアノという喜び

小山 実稚恵

駒場の音楽活動の華のひとつは、駒場コミュニケーションプラザに設置されているスタインウェイ・フルコンサートグランドピアノの演奏会です。小山実稚恵さんは、日本を代表するピアニストで、多くの演奏会を開く傍ら、忙しい日程をぬって、これまで三回もこのピアノを演奏して下さいました。三回目は昨年十二月十八日開催の第十三回室内演奏会でした(左のポスター)。

弦楽四重奏のクアルテット・エクセルシオと共にシューマンのピアノ五重奏曲を演奏されました。こうした活動はひとえに、若い人たちに音楽に接してほしいという小山さんの熱い気持ちからです。その小山さんに、音楽に寄せる想いを綴っていただきました。

これほどに音楽が好きになるとは…。ピアノが好きで音楽が好きで演奏をし続けてきましたが、音楽への思いが日に日にクレッシェンドしていることに私自身が驚いています。ピアノほど面白く、そして興味の尽きないものはありません。



全ては一期一会。演奏をしているときに、殊更その思いを強くします。音楽と自分の間に生まれる特別な瞬間は、あらゆるものが一つに凝縮されて作り出されるもの。必然と偶然が織り成す産物です。演奏する自分、楽器、空間……。全ての条件が刻々と変化してゆくのに、そこにある音楽だけは普遍の力を持っている。感情を揺さぶられるも、好奇心を掻き立てられるも、幸福感に満たされるも、苛立ちを覚えるも、自分の力だけではどうにもならない世界がそこに存在するからこそ、音楽は魅力的なのです。そしてその魔力にとり憑かれてしまうのでしょうか。心に残るのは印象に基づく記憶だけですが、それとていつの間にか自分の中で作り変えられて一つの想い出となっていく。最後は個々の感性が創り出すものであるからこそ、音楽は時空を超えて人間の心に生き続けるのです。

まず、作品との出会いが一期一会です。星の数ほどあるピアノの作品の中から自分のレパートリーをどのように確立していくのか。レパートリーは、言ってみれば財産のようなものです。音楽を道として選んだからには必ず弾かなければならない作品(コンサートや人前で演奏するかどうかは別として、少なくとも自分自身で弾いてみるべきだと考える作品)、単純に自分自身が弾きたいと願う作品、縁が元で演奏の機会に恵まれる作品、何度演奏していても再び腰を据えて取り組みたい作品……。常に心を開きながら、自分が惹かれる

音楽に向かって進むしかありません。音楽人生の歩みがレパートリーの構築と重なってゆくののだと思います。

そして、楽器がもたらす一期一会。ピアノは持ち歩けないので、ホールにある楽器を弾くわけですが、最初の音を聞いてみるまでは、その日の運命はわかりません。幸運か不運か、それは毎回出たとこ勝負です。何度か演奏した事のある舞台でさえも、その日の楽器の気まぐれによって、コロコロ変化していきます。調律師にベスト・コンディションを目指して全力で調整していただき、あとは私自身ができる限りの手を尽くすだけ。そこにある楽器とどれだけコミュニケーションが取れるにかかっています。生き物のように七変化するピアノとの対峙は、毎回緊張感に満ちた出会いですが、だからこそ、時には想像を超えた極上の響きが生まれることもあるのです。

偶然が多く入り込む環境の中で、求める結果を出すためには、当然、心も体も良い状態を保たなければなりません。自らのコンディションの万全を期して、できる限り良い環境を作り上げ、心技一体を目指す。そうりたいとは思いますが、しかし、最高の状態が確立できたからとて、最高の結果が得られるわけでもないのも事実です。実際、コンディションが最悪(体の調子が悪かったり、ピアノの状態が思わしくなかったり、会場の響きがあまりにない、デッドだったり……)で、何とかしなければと全力で集中力を高めている内に、

次第に全身が感覚の渦のようになって、思いもかけない素晴らしい瞬間を作り出せることもあります。

予測不能の可能性を秘めた音楽には、諸条件もコンディションも越えてしまいうような圧倒的な力があります。無限の世界の中に一念を通ず時に、心に響く音楽が誕生するのでしょうか。

素晴らしいものは勿論素晴らしいのだけれど、それだけでは無い世界。

心揺さぶられる音楽の虜になって、私は、一生の果てには、どこまで音楽が好きになってしまおうのでしょうか。

(ピアニスト、駒場友の会会員)

駒場祭で得られるもの

竹内 萌

今年度の駒場祭(第六三回)は、十一月二三日(金・祝)から二五日(日)まで開催され、十二万人の来場者を迎えることが出来ました。開催に当たっては、駒場友の会からのご支援(協賛)をいただきました。このお力添えは、駒場祭に関わる多くの学生の大学生活、ひいてはこれからの人生の充実をもたらしたいと思います。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

私は駒場祭委員会の一員として活動しました。この委員会は学生によるもので駒場祭の主催者となります。前期課程の上級生である二年生が中心となつて、協賛の依頼などの金銭的な面はもちろん、学部との交渉や地域の方々との交流など、本当に「すべて」の

ことを学生が行っていきます。これまでの学生生活で「学生主体」と言われてきたことが、どれほど守られた環境であつたかを痛感しました。駒場祭の企画実行を支える多数の学生の自主的な活動には驚かされることもたくさんありました。

私たちは、学園祭として全国有数の規模と歴史を持つ駒場祭を、学生だけの自主的な活動から創りあげているという自負を持って取り組んでいます。しかし、駒場祭からは、金銭的利益も単位も得られません。それなのにどうして私たちはそのような駒場祭に真剣に取り組んでいるのでしょうか。

東京大学に入学するために、今まで受験勉強を頑張ってきました。念願がなつて入学した東大で過ごせる貴重な期間は短い以上、勉学に集中すべきだという考えはもつともだと思えます。学園祭は一見無駄なことのように思えるかもしれませんが、そのような恵まれた環境にいられるからこそ、与えられた勉学だけに満足することではないと私は思っています。

私が二年生になつて勉学以外で打ち込んできたこと、それは駒場祭です。秋の駒場祭に向けて、委員会では四月から準備を進めていて、制度設計など



駒場祭公式マスコット
「こまっけろ」



駒場祭の土台作りに一から携わってきました。そして初日を雨で迎えた当日、私は取材担当としてカメラを構えて、キャンパス中を歩き回りました。

一枚でも多くのよい写真を撮ろうと、とにかくその場に一生懸命で、あまり多くのことが思い出せないほどに濃い三日間は、とても楽しかったです。なにより自分が撮った全部で六千枚にも及ぶ写真には、多くの来場者の笑顔や、雨の中でも真剣な参加者の表情、お祭りの雰囲気盛り上がる駒場キャンパスが写っていて、見返すたびに当日の興奮が蘇ってきてつい笑顔になります。

参加した学生には「駒場祭は楽しかった」「大変だった」「くらいにしか感じていない人もいるかもしれませんが、きっと各々が将来につながる何かを得たはずです。

駒場祭は笑顔や学びを生み出す場として、時代が変わっても続いていくの

でしょう。同様に駒場祭が行われる土台である駒場の環境もまた、いつも私たちを迎えてくれるのだと思います。

私は駒場祭を通して、駒場のことがもっと好きになり、自分が帰ることができる「ホーム」であると感じるようになりました。

私はそんな駒場で、各分野に造詣が深い先生方、語学をともにするクラスメイト、意見を闘わすことのできる友人、異なる視野を持つ先輩・後輩、話しているだけで幸せになれる仲間と出会いました。駒場祭は、駒場での出会いや恵まれた環境を意識させる場であり、その場を自主的に創造していることに意味があるのだと思います。

駒場祭に限らず一生懸命さは、私たちの活動にとって大事なことであり、大学生活をさらに充実させます。この充実感はうまく表現できないがゆえに、周りで支えてくれる人たちに心配をかけることもあります。私はその充実感の中を進んでいくことが楽しくて、歩みを止めることができません。

そうして進んでいき、高校時代に憧れだった駒場キャンパスで、私たち学生は新しい視点に気づき、大人としての基礎を築いています。「ホーム」である駒場で身に付ける教養を手に、もっと深く広い社会に進んでいくことができますのかと思うと、期待に胸が高鳴ります。私たちは「駒場祭」から、さらなる高みへと羽ばたいていくのです。

(第六三期駒場祭委員会)

広報局取材担当／教養学部二年)

追悼・本間長世先生

瀧田 佳子

例年がない暑さがまだ残る昨年九月十五日、本会の初代会長、名誉会長の本間長世先生は遠く旅立たれました。

この一年ご体調は一進一退とはいえ、まだまだお元気なお話が伺えると思っていた私たちは、それから六カ月が過ぎようとしても悲しみが癒されることはありません。

リベラルアーツ教育が育った駒場の地に、「同窓会」よりもゆるやかな、歴史や地域とのつながりも持つ「友の会」を設立しようという構想が二〇〇二年頃に芽生え、古田元夫先生や故大澤吉博先生はじめ準備委員会が出来ました。中心となつてリードして下さる役割を本間先生に、ということとはごく自然に決まったような気がいたします。

先生は二〇〇四年の発足から二期四年間会長として友の会が進むべき道筋をつけて下さり、また一昨年帰天され

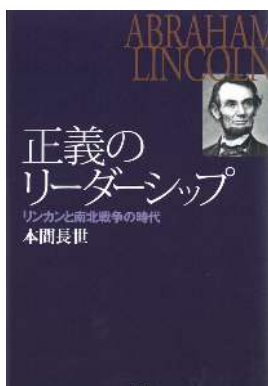


第一回駒場友の会講演会「雄弁について」。2005年12月3日、教養学部学際交流ホールにて講演される本間先生

た嘉治元郎先生とともに旧制一高などの駒場の伝統の継承にも労を惜しまれず、その後を、毛利秀雄先生、遠山敦子先生、竹田晃先生、蓮實重彦先生、小林寛道先生などの理事や、事務局の現任教職員に託されました。

先生は一九四八年に旧制一高に入学され、新制東京大学の教養学部創設された教養学科アメリカ分科の第一期生として学ばれました。卒業後は東部の名門アマースト大学に留学、本場のリベラルアーツを深められました。さらにコロンビア大学大学院に進まれ、アメリカを総合的に捉え、歴史の意味を探りたいという思いから思想史(インテレクチュアル・ヒストリー)研究に向かわれました。

教養学科同窓会誌創刊号には勉学に勤しみながらもニューヨーク見物を楽しむ日本人留学生たちの姿を生き生きと報告なさっています。帰国後、東大駒場で教鞭をとられるなかで刊行された『理念の共和国』(一九七六年)、『アメリカを支えるアメリカ人』(一九八二年)、『アメリカはどこへ行くのか』(一九八七年)、さらに『移りゆくアメリカ』(一九九一年)、『思想としてのアメリカ』(一九九六年)を始めとする



本間先生によるアメリカ史三部作のひとつ、『正義のリーダーシップ』(2004年)

著作はどれも、外国人による地域研究は全体像をこそつかむべきだとする先生の姿勢に支えられていて、その先には日米関係への深い洞察があります。

先生は教養学部長、東京大学総長特別補佐、成城学園長ほか数々の重責を果たされたのみならず、アスペン研究所や国際文化会館などでの活動を通して真の知識人としての研究者のありかたを社会に示されました。これらの業績により二〇〇二年には文化功労者選ばれました。

日本からの国際的発信の重要性を説いたのはE.O.Reischauerでしたが、そのライシャワー記念レクチャーの第一回として一九九四年、アメリカで講演をされたのも本間先生でした。傑出した知性と品位を備えた学者である一方、歌舞伎では富十郎、ポピュラーソングではプレスリーのファンである先生は、ハイカルチャーからマスカルチャーまで、ユーモアたっぷりに実演をまじえて語ることでできる稀有の才能の持ち主でもあったのです。

先生は最後まで執筆の意欲は衰えることなく、あと僅かで完成するはずのご本には、自然科学の内容も含まれていたとかがっています。『歌舞伎とプレスリー 私とアメリカ』(二〇〇九年)が語るように、アメリカが輝いていた頃から知識人と直接交わり、ご家族での幾度もの滞在を通して様々な分野のアメリカ人との付き合いが長い先生の目に、最近のアメリカ、さらに日本を含めた世界がどのように映っている

たのでしょ

『駒場友の会会報』第一号(二〇〇四年)に、「二十一世紀に求められるリベラル・アーツの教育を駒場において発展させるためのサポーターとして、駒場友の会がゆるぎない存在感を備えるようになれば、もろもろの同窓会も包み込んだ新しい発想の組織が機能することになります」と先生は述べられました。この言葉は常に私たちの未来への指針であり続けるでしょう。

会員一同、心からご冥福をお祈りいたします。

(東京大学名誉教授、

駒場友の会理事、アメリカ研究)

【事務局便り】

駒場友の会では、今年度の事業として、学生の国際交流の促進支援に取り組んでいます。

海外主要大学との短期交換留学生プログラム(AIKO)の「伊勢・熊野・高野山見学実習」を七月に実施しました。また、ハーバード大学生との交流プログラム(HCAP)、北京大学生との交流プログラム(京論壇)、ベトナム国家大学・ソウル国立大学・北京大学とのBeSeToHa合同合唱祭にも助成し、成果をあげました。三鷹国際学生宿舎の交流ホールに大型テレビを寄付するなど様々な活動を展開しています。これらの事業は会員会友の皆様からのご寄付に依っていますので、多くの方々のご協力をお願いいたします。詳しくは同封の案内をご覧ください。

新入生歓迎特別講演会のお知らせ

酒井邦嘉先生による

「脳を創る読書とは」

四月十五日(月)午後六時二〇分から

会場：教養学部2KONCEE

地下一階レクチャーホール

大学での学びについての楽しい講演です。新入生対象の講演会ですが、駒場友の会会員会友の参加も歓迎します。

酒井邦嘉先生は、言語脳科学者。大学院総合文化研究科・教養学部教授。著書に、『科学者という仕事』(中公新書)や『脳を創る読書』(実業之日本社)など。

ロコモ体操特別教室のご案内

渡會公治先生の「中高年のための美しく立つ教室」は、第一と第三週の水曜日に開催しています。時間は午後一時から二時まで。会場は、駒場コミュニケーションプラザ北館三階。

会員会友限定。要予約。駒場友の会事務局(〇三ー三四六七ー三三三六)で予約を承ります。

誰にでもできる体操で健康づくりをしましょう。渡會公治先生は、スポーツ整形外科医です。体の仕組みから説き起こす体操教室は、参加者に大変に好評をいただいています。毎回二五名程度の方に参加いただけます。



駒場友の会会報 第20号

2013年3月10日発行

駒場友の会
〒153-8902

目黒区駒場3-8-1 東京大学

駒場ファカルティハウス内

電話 03-3467-3536

FAX 03-3465-3334

郵便振替口座

00170-3-481649

メール

info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp

ホームページ

http://www.c.u-tokyo.ac.jp/

ilovekomaba/

デザイン・印刷 株式会社双文社印刷

http://www.sobun-printing.co.jp

穏やかな日差しの中でゆったりとくつろぐことのできる

フランス料理

ルヴェ ソン ヴェール 駒場

駒場友の会の皆様がお食事の際に注文なさった
コーヒー・紅茶は、お支払いの際に会員証・会友証を
ご提示下さいますと無料になります。

営業時間 11:00 ~ 14:30、17:00 ~ 21:00

Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902

駒場ファカルティハウス内

駒場友の会第十回総会のお知らせ

五月二五日(土)午後四時四十五分より

会場：駒場コミュニケーションプラザ

北館二階多目的教室

学生選抜コンサートも同日に開催します。どうぞ奮ってご参加ください。詳細は追ってご案内いたします。